

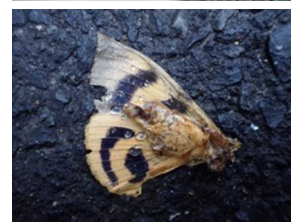
## 生存戦略の良し悪し

### 1. アケビコノハ

アケビの葉を食べる木の葉に似たガの意味で、アケビ科で近縁のムベ、メギ科の外来園芸品種であるヒイラギナンテンも食草です。後翅は黄色に黒の眼状紋が入り目立つのですが、前翅は茶褐色で葉脈まである落ち葉そっくりの形態となっています。前翅を合わせてたたむと後翅が隠れ、全くの枯れ葉となります。わかっているのでしょうか、落ち葉のある場所で横になって静止します。ものまねであり擬態と呼ばれますが、行動も伴っています。



幼虫は危険を感じると、左の写真のように頭部を腹側に曲げて目玉模様の部分を持ち上げ、さらに腹部の先端を上げます。この目玉模様を誇示する形は威嚇行動と考えられています。ここにも形態と行動の一致があります。

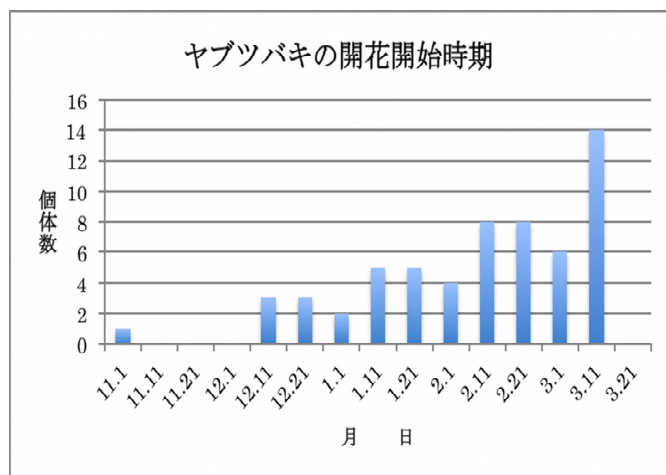


7月頃に現れる夜行性の成虫はモモやナシなどの果物を吸汁するため、果樹栽培農家は袋掛けが必要となる害虫として嫌われています。秋遅く出現する2化目の成虫は、そのまま越冬して春に産卵します。落ち葉の上に横たわって越冬することは、あまり安全とはいえないようで、右の写真のアケビコノハは草の間の落ち葉の中で死んでいました。後翅の黄色が見えなかったら気づかなかったでしょう。雪の少ない時の観察事項です。

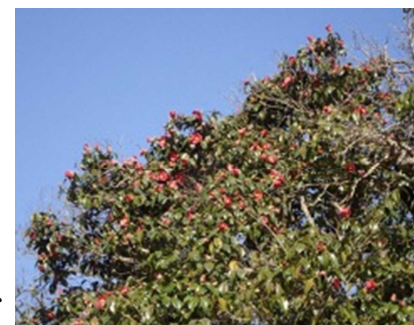


### 2. ヤブツバキの開花時期

ヤブツバキは打吹山全体に多いのですが、開花時期にはかなりの個体差があります。椿の平周辺の59本について調査してみたところ、早いものでは11月には開花する木があります(右図)。だんだん増えていって、3月上旬には全ての木が開花を始めました。当然、同じ木の蕾でも同時に開花するわけではなく、2月16日に1輪開花した木が24日には右下の写真のようになりました。この木では、約20%が開花することなく蕾のまま落下します。また、開花直後に果実が肥大することなく落下するものが50%近くありました。すなわち受粉していないのかもしれませんが。



競合する種の少ない冬に開花して花粉運搬者を呼ぼうとしているツバキですが、個体による開花時期の違いはどのような意味を持つのでしょうか。例えば、種子食害昆虫であるツバキシギゾウムシが産卵を開始する5月までに果実を肥大させて産卵を防ぐ、あるいは、受粉を助けるメジロやヒヨドリに長期間蜜を供給することでこの場所に引きつけておく、など考えられます。しかし、最初の例は種子の残せない個体は減り、早期開花の個体が増えることになり、実態と合いません。



理由の証明は難しいことですが、何故と考えることはウォッチングを面白くしてくれるでしょう。